広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代朝鮮語におけるtɨnciとtɨnkaについて
Author(s)	深見, 兼孝
Citation	ニダバ , 16 : 19 - 26
Issue Date	1987-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047181
Right	
Relation	

論　文

現代朝鮮語における tɪnci と tɪnka について

深　見　兼　孝

はじめに

本小稿は現代朝鮮語における tɪnci と tɪnka の用法の分析を基に、両者の意味を定式化するための手がかりを探ろうとしたものである。

1　tɪnci の意味[1]について

（1）　tɪnci の用法から

次の例文を見られたい。

1　ne　ka　ka　tɪnci　mal　tɪnci　nɛke　(＜na　eke)　nɪn
　'おまえ'　主　'行く'　　'行かない'　　'私'　与　主題

　saŋkwanəpt'a　/　nɛ　ka　alpaka　anita.
　'関係ない'　　'私'　主　'知ったことではない'

この例文は、聞き手が ka-'行く'ことと mal-'行かない'ことの区別、または違いが、話し手にとって「意に介するようなことではない」ことを表している。つまり、話し手は聞き手が「行っても行かなくても、どちらでもかまわない」のである。続いて次の例文を見られたい。

2　na　nɪn　myəŋnyəŋ　i　nɛli　myən　k'ampotia　tɪnci
　'私'　話題　'命令'　主　'下る'　条　'カンボジア'

　ap'ɪkanisɪt'an　itɪnci　ka　ket　ta.
　'アフガニスタン'　　'行く'　意　終

この例文では、話し手は「カンボジア」と「アフガニスタン」の区別をせず、「どちらであっても行く」という自己の意志を述べている。さらに次の例文を見られたい。

3　kɪ　salam　ɪn　myəŋnyəŋ　man　nɛli　myən　mikuk　itɪnci
　'彼'　主題　'命令'　'さえ'　'下る'　条　'アメリカ'

ilpon　itınci　kalk'əsita.
'日本'　　'行く(+推+終)'

この例文では、一見「彼」が「アメリカと日本の区別に関係なく行くだろう」という話し手の推量が表されているように見える。しかし、これは3の正確な意味記述とは言えないだろう。というのも、この文で話し手の推量が表されていることには違いないが、「日本」と「アメリカ」の区別は文の主語が表す人物ではなくて、話し手が行なうものだからである[2]。

次の例文を見られたい。

4　nɛ　ka　pul　k'ı　lə　ka　tınci　ne　ka　pul　k'ı　lə　ka
'私'　'主'　'火'　'消す'　'目的'　'行く'　　'お前'　主　'火'　'消す'　目的　'行く'

tınci　pul　ın　k'əci　ci　an　nınta.
　　'火'　主題　'消える'　否　　終

4は、「話し手が火を消しに行っ」ても「聞き手が火を消しに行っ」ても、いずれであっても「火は消えない」という話し手の判断を表している。すなわち、この話し手の判断に対し、「話し手が火を消しに行く」か「聞き手が火を消しに行く」かは影響を与えていないのである。ここで、上の2.3もこれと同じような記述ができるので、まとめて「tınci」を含む文は、それが導く二つの部分の表す内容の区別や違いに左右されない、話し手の判断、推量、意志などを表す」としておこう。例文1や2の「かまわない」というニュアンスもここから出てくるものと思われる。

では、次の例文を見られたい。

5　c'əlsu　tınci　yəŋca　tınci　ka　nta.
　人名　　　人名　　'行く'　終

この文で、「行く」のは① c'əlsu、② c'əlsu と yəŋca、③ yəŋca の3つの場合がある。従って、tınci は単に主語を列挙しているのではない。さらに次の例を見られたい。

6　c'əlsu　tınci　yəŋca　tınci　kı　cuŋ　e　han　salam
　人名　　　人名　　'その'　'中'　属　'一つの'　'人'

i　ka　nta.
主　'行く'　終

6は言うまでもなく「選択」の意味がある。勿論これは kı cuŋ e han salam によって与えられているのだが、もし tınci が単に「列挙」の意味しかないのなら、6は成立しないであろう。筆者はむしろ tınci に「選択肢の列挙」という働きがあると見たい。こう見れ

ば、6では二つの選択肢のうち一つが、5では両方が選択されうると考えることができ、両文の適格性が説明できる。

このように考えてくると、tɪnci を含む文は「tɪnci によって列挙された選択肢のいずれにも左右されない話し手の判断、推量、意志などを表わす[3]」と見ることができる。

（2） 類義語 na との比較[4]から

次の例を見られたい。

7 a hɪi n koyaŋi tɪnci kəm ɪn koyaŋi tɪnci cyi
'白い' 冠 '猫' '黒い' 冠 '猫' 'ねずみ'

lɪl cam nɪn koyaŋi nɪn co ɪn koyaŋi ta.
対 '捕える' 冠 '猫' 主題 'よい' 冠 '猫' 終

b ?hɪi n koyaŋi na kəm ɪn koyaŋi na cyi lɪl
cam nɪn koyaŋi nɪn co ɪn koyaŋi ta.

7 a の tɪnci を na で置き換えた 7 b は座りが悪い。一方、先の 6 の tɪnci を na で置き換えた次の 8 は適格性に変わりはない。なぜだろうか。

8 c'əlsu na yəŋca na kɪ cuŋ e han salam i ka nta.

6 においても 8 においても、c'əlsu と yəŋca が選択肢であることには違いがない。ただ、8 の選択肢は 6 のそれと違って「理想のものの代用」[5]である。一方、7 の文脈からは hɪi n koyaŋi と kəm ɪn koyaŋi を「理想のものの代用」と見ることはできない。むしろ、両者は色について対義関係にあり、選択の両限を示したものと考えられる。7 b が座りが悪いのはこのためであろう。なお、tɪnci が「理想のものの代用」という意味が明らかに表われる文脈で用いられるかどうかについては考察が及んでいない。

2 tɪnci と tɪnka の違い

第一節で挙げた例 1 ～ 7 のうち tɪnci を tɪnka と置き換えても文の適格性に変化がないのは 1、4、5、6、7 である。例 2、3 と 7 の違いは tɪnci が結合している二語の意味関係にある。すなわち、2 の k'ampotia と ap'ɪkanisɪt'an、3 の mikuk と ilpon と違い、7 の hɪi n koyaŋi と kəm ɪn koyaŋi は色について対義関係にあるのである。 tɪnka が導く二つの部分が対義関係にあるかどうかは、その文の適格性に影響を与えているらしい。

次の例を見られたい。

9 a mɛŋsu lɪl manna tɪnci aŋma lɪl manna tɪnci na nɪn
'猛獣' 対 '会う' '悪魔' 対 '会う' '私' 主題

kəki lo ka yaket ta.
'そこ' 處 '行く' 義 終

b ?mɛŋsu lɪl manna tɪnka aŋma lɪl manna tɪnka na nɪn
kəki lo ka yaket'a

10 a na nɪn mɛŋsu lɪl manna tɪnci aŋma lɪl manna tɪnci
'私' 主題 '猛獣' 対 '会う' '悪魔' 対 '会う'
hanpən ka po ket ta.
'一度' '行く' '見る' 意 終

b ?na nɪn mɛŋsu lɪl manna tɪnka aŋma lɪl manna tɪnka
hanpən ka po ket ta.

9、10 のいずれも tɪnka を含むb文は座りが悪い。ところが、これらの文の mɛŋsu を sin '神' で置き換えると、次の例11が示すように、「義務」を表す9の方は座りがよくなる。これに対し、話し手の「意志」を表す10は12のように相変わらず座りが悪い。なお、例は省略するが tɪnci を含むa文には変動がない。

11 sin ɪl manna tɪnka aŋma lɪl manna tɪnka na nɪn kəki
lo ka yaket ta.

12 ?na nɪn sin ɪl manna tɪnka aŋma lɪl manna tɪnka hanpən
ka po ket ta.

mɛŋsu と aŋma に対して、sin と aŋma は対義関係にあることに注目されたい。なお、述語が「意に介さない」という意味を表す場合(13)や、「勧誘」を表す場合(14)は、mɛŋsu であっても、sin であっても、
tɪnci、tɪnka が共に用いられる。

13 a mɛŋsu / sin ɪl manna tɪnci aŋma lɪl manna tɪnci nɛ
ka alpaka anita.

b mɛŋsu / sin ɪl manna tɪnka aŋma lɪl manna tɪnka nɛ
ka alpaka anita.

14 a mɛŋsu / sin ɪl manna tɪnci aŋma lɪl manna tɪnci
hanpən ka po ca.
勧

b mɛŋsu / sin ɪl manna tɪnka aŋma lɪl manna tɪnka
hanpən ka po ca.

これとよく似た特徴を示すのが、次の15、16のように、tɪnci 、tɪnka の一方が否定語 mal- と結合している場合である。15b、16bは先の11、12と平行である。

15 a nɛ ka c'an nɪn kəs i kəki e it tɪnci mal
'私' 主 '探す' 現冠 'もの' 主 'そこ' 處 'ある' 否
tɪnci na nɪn kəki lo ka yaket ta.
'私' 主題 'そこ' 處 '行く' 義 終

b nɛ ka c'an nɪn kəs i kəki e it tɪnka mal
tɪnka na nɪn kəki lo ka yaket ta.

16 a nɛ ka c'an nɪn kəs i kəki e it tɪnci mal
tɪnci na nɪn kəki lo ka po ket ta.
意 終

b ?nɛ ka c'an nɪn kəs i kəki e it tɪnka mal
tɪnka na nɪn kəki lo ka po ket ta.

また、次のように述語が「意に介さない」という意味を表わしている時は、tɪnci も tɪnka も用いられる。

17 a ne ka ka tɪnci mal tɪnci n ka alpaka anita.
'おまえ' 主 '行く' '私' 主 'したことではない'

b ne ka ka tɪnka mal tɪnka nɛ ka alpaka anita.

tɪnci 、tɪnka の一方が mal- と結合していることは、対義関係にある二語と結合していることと通じるところがあるのであろう。

ではなぜ、「意に介さない」ことを表す文や叙法性を表す形態素を述語に持たない文（例えば4や7）が tɪnci と tɪnka を入れ替えることができるのに対し、叙法性を表す形態素述語に持つ文のうち、「義務」を表す文は tɪnci 、tɪnka が対義関係にあるものと結合している時や一方が mal- と結合している時に入れ替えができ、「意志」を表す文ではそれができないのだろうか[6]。思うに、文末の叙法性が高くなればなるほど tɪnci 、tɪnka が導く部分は条件を表す意味あいが濃くなり、それとともに文の一部を成す句や節としての

まとまりが要求されるのではないだろうか。そして、tınci が tınka よりその力が大きいのではないだろうか。また、tınka が対義関係にある部分を導いていたり、一方が mal－と結合している時は、そこにある程度のまとまりが与えられるのではないだろうか。もし、この考えが正しく、「意志」が叙法性の最も高いものであるなら、この疑問は解消する。さらに、tınci 、tınka が先の例５、６のように主語を導いている場合は、文末の叙法性がいくら高くなっても、その句としてのまとまりは要求されないのではないだろうか。この節の最初に例５、６は tınci と tınka を入れ替えることができると言ったが、次の例のように述語が「義務」(18)や「推量」(19)を表している時も、tınci 、tınka のいずれも用いられる。

18 a c'əlsu <u>tınci</u> yəŋca <u>tınci</u> ka yaha nta.
人名 人名 '行く' 義 終

b c'əlsu <u>tınka</u> yəŋca <u>tınka</u> ka yaha nta.

19 a c'əlsu <u>tınci</u> yəŋca <u>tınci</u> ka l k'əs ita.
推 終

b c'əlsu tınka yəŋca <u>tınka</u> ka l k'əs ita.

また、次のように tınci と違って tınka に主格助詞が結合しないのも、それが導く部分が句として充分にまとまっていないからだという説明が成り立たないだろうか。

20 a c'əlsu <u>tınci</u> yəŋca <u>tınci</u> ka ka nta.
主 '行く' 終

b *c'əlsu <u>tınka</u> yəŋca <u>tınka</u> ka ka nta.

おわりに

tınci 、tınka の意味の定式化に向けての難関の一つは、注で示唆したように文末述語の類型化が難しいことである。これを乗り越えるには、類義語の na 、kəna や kən 、さらに tın との徹底した比較が必要であろう。後日機会を得てさらに追及して行きたい。

＜付記＞

・例文の分析に使った略語は次の通りである。: 主＝主格、対＝対格、處＝處格、与＝与格、現冠＝現在冠詞形、冠＝冠詞形、条＝条件形、終＝終止形、義＝義務、意＝意志、

推＝推量、否＝否定。

・インフォーマントは広島大学留学生の朱珽萬、崔仁泓両君にお願いした。感謝の意を表したい。

注1　参考にした辞典は申＆申（1983、第三次修正増補3版）、李（1982、修正増補版）、大阪外国語大学朝鮮語研究室（1986）である。tɪnkaについては三者とも「tɪnciを見よ」としているだけである。

2　そうすると、話し手は「区別して区別しない」ということになって奇妙に感じられるが、既に崔（1978[7]）に「…区別をしておいて、次にこれを区別しない…」（P.643）という説明が見える。

3　「A tɪnci B」において、A、Bは選択肢として区別されたものであるが、実際の発話において話し手はA、Bの区別をしないことを言うのである。これは注2の崔(1978[7])の言葉と通じる。

4　tɪnci の類義語として他にkəna 、その省略形とされる kən、 tɪnci の省略形とされる tɪn があるが、今回はこれらとの比較をすることができなかった。

5　梁（1973）参照

6　叙法性を表す形態素を持つ述語のうち、いわゆる「推量」を表す例については適当なものが見当たらなかったが、次の例から察するに、対義関係にない語と結合している時は、tɪnci と tɪnka は入れ替えができないのであろう。

a　ne　ka　kɪ　il　ɪl　ha　<u>tɪnci</u>　poŋki　ka　kɪ　il
　'おまえ'　主　'その'　'こと'　対　'する'　　人名　主　'その'　'こと'

　ɪl　ha　<u>tɪnci</u>　cal　an　twe　ket　ta.
　　'する'　　'うまく行かない'　推　終

b　?ne　ka　kɪ　il　ɪl　ha　<u>tɪnka</u>　poŋki　ka　kɪ　il

　ɪl　ha　<u>tɪnka</u>　cal　an　twe　ket　ta.

また、次の例のように、「意に介さない」という意味の nɛ ka alpaka anita が述語の時は、同類の nɛke nɪn saŋkwan əp'ta と違って、一方が mal-と結合していなければ tɪnci と tɪnka を入れ替えることができないこともある。

c　c'əlsu　ka　mikuk　e　yuhak　ɪl　ka　<u>tɪnci</u>　ilpon　e　yuhak
　人名　主　'米国'　處　'留学'　対　'行く'　　'日本'　處　'留学'

　ɪl　ka　<u>tɪnci</u>　nɛke　(＜na　eke)　nɪn　saŋkwaŋ　ə'pta　/　nɛ
　対　'行く'　　'私'　与　主題　'関係ない'　　'私'

　ka　alpaka　anita.
　主　　'知ったことではない'

d c'əlsu ka mikuk e yuhak ɪl ka tɪnka ilpon e yuhak ɪl ka tɪnka nɛke nɪn saŋkwan əpt'a / ?nɛ ka alpa ka anita.

e c'əlsu ka mikuk e yuhak ɪl ka tɪnci mal tɪnci nɛke nɪn saŋkwan əpt'a / nɛ ka alpa ka anita.

f c'əlsu ka mikuk e yuhak ɪl ka tɪnka mal tɪnka nɛke nɪn saŋkwan əpt'a / nɛ ka alpa ka anita.

これは alpa ka anita が -l を含んでいるためだろうか。さらに、次の例が非文であることから察するに、tɪnci 、tɪnka を含む文の述語はいかなる判断でも表すことができるというわけではなさそうである。

g *mikuk e ka tɪnci ilpon e ka tɪnci ton
'米国' 虞 '行く' '日本' 虞 '行く' 'お金'
i munce ta.
主 '問題' 終

h *mikuk e ka tɪnka ilpon e ka tɪnka ton
i munce ta.

参考文献

大阪外国語大学朝鮮語研究室編（1986）「朝鮮語大辞典」 角川書店
崔鉉培（1978⁷）「 Ulimalpon 」P.643 正音社
申琦澈・申瑢澈（1983、第3次修正増補3版）「 Sɛulimalk'ɪnsacən 」三省出版社
李熙昇（1982、修正増補版）「 Kukətɛsacən 」民衆書林
梁縯錫（1973）"Semantics of Delimiters." 語學研究 9 − 2 pp.84−121